

社会科

中世の日本—律令国家とその変容

—院政から武家政権の成立—

柳生大輔

1 はじめに

「中世の日本—律令国家とその変容」の授業構想

(1) 授業の位置づけ

歴史学習とは、社会科の授業で学習した内容を通して、過去と現在とを結びつけるものであり、その手段となるのが言語力やコミュニケーション力である。新学習指導要領社会編歴史的分野の3内容の取扱い(1)イでは、「歴史的事象の意味・意義や特色、事象間の関連を説明したり、課題を設けて追究したり、意見交換したりするなどの学習を重視して、思考力、判断力、表現力等を養うとともに、学習内容の確かな理解と定着を図ること」とあり、思考力・判断力・表現力を高め、確かな理解と定着を図るために、言語活動の充実が求められている。また、内容に「各時代の特色を考える学習、時代の転換の様子をとらえる学習、我が国の歴史の大きな流れを理解する学習等」が位置づけられている。本単元のねらいは、奈良時代から鎌倉時代における政治システムの変遷に着目して、時代の転換していく状況をつかませていくことである。その手だてを提案していきたい。

(2) 授業づくりのポイント

授業づくりでは、新学習指導要領で示された「学習した内容を活用してその時代を大観し表現する活動を通して、各時代の特色をとらえさせる」ことが重要である。奈良時代から鎌倉・室町時代へと時代が移り変わる中で、各時代の特色は、その時代だけを見るのではなく、前の時代と比較し、時代の変わり目で一体何が起きたのかということを考えることで、より一層明確になる。そのため

には、新たな時代をある程度学習した段階で、前の時代と比較して特色を考えていくことが、日常的に歴史を大きな流れとして捉えようとする意識形成に有効であると考えられる。

2 教材開発と活動開発をどう進めるか

(1) 教材開発のポイント

本単元における教材開発では、律令制、摂関政治、院政、鎌倉幕府のしくみ、執権政治などについて理解することは勿論のこと、特に生徒につかませにくい、「武士の起こりから武士が中央政権に進出する過程」と「平安時代中期頃から全国的に広まった荘園」の理解に重点を置きたい。荘園の理解は、鎌倉時代の地頭の荘園侵略や封建制度、太閤検地などにもつながり重要である。授業時数は限られているため、学習内容の焦点化が必要である。

(2) 活動開発のポイント

授業活動については、思考力・判断力・表現力の土台となる、基本的学習事項の理解と適切な資料の活用はもちろんのこと、小グループによる協同学習の中で、自分の言葉でお互いに説明し合う活動を取り入れ、互いの考え方を吟味し合い、思考を再構成させる機会を持たせていきたい。「武士はどのようにして起こり、政権を握っていったのか。」「古代から中世への転換期はどこなのか。」これらの問いに対して自分の考えを記述したり、他者に説明していく力を身に付けさせたい。容易なことではないが、継続した取り組みが必要である。

3 効果的な授業手法・活動例

(1) 授業の準備・教材の工夫

小学校での既習知識や日常生活の中で習得した歴史の知識の拡充を意識し、小学校での学習内容の活用による大観的な学習を、中学校の歴史学習に取り入れていかなければならない。本単元第5時では、鎌倉時代の学習を終えた段階で、古代から中世への歴史の進展過程をグラフで表現し、歴史を大きくとらえ時代を大観させる活動を展開していく。グラフは横軸に時間、縦軸に勢力を表す折れ線グラフで表すことで視覚的にも理解しやすくなる。またグラフの中には、そのように作成した理由を書き込ませることで表現力の育成にもつながる。

(2) 学習課題のもたせ方

思考するために必要な知識を獲得する授業（第1時～第4時）では、律令国家の成立、貴族による政治、院政、武家政治の確立といった国家運営の重要な要素である政治システム（政権運営）の変遷を理解しなければならない。その際、現在の政治状況にも目を向けさせたい。近時、民主党から自民党へ政権が交代するも（実際の授業時はまだ民主党政権であった）、未だに景気回復をはじめ沖縄米軍基地移転問題や尖閣諸島などの領土問題、TPP参加交渉問題に関する政府判断など難題が山積している。このような政治状況を導入として位置づけることで、政権運営の難しさを、時代を超えて認識しやすくなる。遠い昔のできごとを知るだけの歴史学習から、現在と比較することでより当事者意識を持つことのできる歴史学習が展開できると考える。

(3) 教師の役割の果たし方

教師の役割として、歴史の変遷をダイナミックに大観させる場面を設定しなければならない。本単元では、日本の政治システムが、朝廷による律令制から貴族による摂関政治、上皇による院政を経て武家政権の誕生・発展に至るまでを扱う。この大きな転換点を律令制の確立・立て直し・崩壊そして私有地である荘園への変遷ならびに、武士

のおこり、荘園に対する朝廷と鎌倉幕府の地頭を中心とした二重支配構造の視点からも理解させなければならない。そしてこの行程は思考すればする程、頭がもやもやして判断しにくくなる。だからこそ、単純に教科書の内容を理解するだけではなく、適切な資料をもとに思考の深まりを促すような発問を投げかける必要がある。また資料の読み取りが弱い場合には、小グループを活用して様々な意見を出し合う中で、解釈を深めていく場面を設けるなどの工夫が必要である。

(4) 核となる活動の取り入れ方

社会科の歴史的分野の授業で核となる活動の一つが、新学習指導要領にある「我が国の歴史の大きな流れ」を理解させることである。そのために、本単元のまとめの授業では、これまで学習してきた内容と歴史を大観する思考過程を連動させて、古代から中世に変わる時代の転換の様子を、グラフという非言語系の表現を利用することによって自分の考えを表現させ、さらになぜそのようなグラフになったのか根拠となった事実をグループ内で話し合わせることで、思考・判断の深化や再構成を促していくものである。

4 指導案作成のポイント（指導計画と指導目標）

(1) 単元名「院政から武家政権の成立」（6時間）

(2) 子どもの育ちをとらえる評価規準（指導計画第5時）

古代の律令国家の特色をふまえ、荘園の出現、貴族の政治、院政を経て武家政権が成立し、武家社会が発展していった歴史の流れを、幕府と朝廷の関係、土地制度の変化などに関連させながら、資料を活用するなどして多面的・多角的に考察し、古代から中世へ変わる転換をグラフ化することで歴史を大観し、各時代の事象を関連づけながら、説明することができる。

(3) 評価場面（第5時）〔第5時の評価を行うことが第6時の評価につながる〕

古代から中世に変わる転換の様子がわかるグラ

<p>化したか。(前の発問の時期と重なる部分もあり、前の発問の説明と関連づける。荘園制の確立は12世紀なので説明には注意が必要。) ◇税を集める国司の動きをつかもう。 ○この時期(10世紀)に、武芸を身につけた武士が登場し、武士団が作られるようになった。武士はどのようにおこったのだろう。</p> <p>◇武士と荘園について資料を読み取りなさい。(荘園整理令がだされなくなり、荘園が乱立し、院・摂関家・大寺院ともに経済基盤を国家的給付から荘園にのりかえる。→荘園制の確立→中世の国政は、朝廷・貴族・武家などの勢力が対立競合しながらも相互補完関係を保った国家体制を構成。) ◇武士が登場した代表的な反乱として、平将門の乱と藤原純友の乱を確認しよう。</p> <p>◇武士の成長過程について見てみよう。 (荘園整理令×→荘園乱立→経済基盤が荘園→貴族・寺院は自ら年貢の収取→荘園の保護→寺院の僧兵、武士が必要) ○中央で武士のはたした役割は何か。 ◇11世紀半ば以降、摂関政治が衰え院政が始まったことを理解しよう。 ○なぜ摂関政治が衰えたのか。 (院政とは、天皇が位を譲って上皇になったのちも政治を行うこと。) ○摂関政治から院政へ時代が変化の中で、荘園はどのように変化していったのか。</p> <p>○やがて皇族・摂関家の権力争いが起こった。12世紀半ば、政治の実権をめぐって展開された保元の乱と平治の乱である。その過程で武士が大きな力を持つようになった理由は何か。</p>	<p>資⑥ 資⑦</p> <p>資⑦</p> <p>資⑦</p> <p>資⑦</p> <p>資⑦</p> <p>資⑧</p> <p>資⑨</p> <p>資⑩</p> <p>すべ ての 教材</p>	<p>制度が崩壊し始める。戸籍制度が崩れて課税ができない。→10世紀：土地に税を課す。税の集め方は国司に任せる。 ◇国司の横暴を資料から読み取る。 ○10世紀に入ると、地方の豪族は土地の開墾につとめ領地を広げていった。その中から武芸を身につけ武士となり、皇族や貴族と結びつく者もあらわれた。 ◇武士は領地を守るために寺院や貴族に寄進し、自ら荘官になり土地を支配。一方、公領(国の土地)は国司の私有地のようにになり、国内は荘園と公領で構成。後に経済基盤が公領から荘園に。 (国家体制：院政期→公武両政権併立の鎌倉期→室町幕府中心の室町期。) ◇資料で確認させる。貴族は自らの力で鎮めることができず武士の力を借りた。この乱をおさえた平氏と源氏の子孫が各地で武士団の棟梁となる。 ◇大寺院では、荘園管理に僧を武装させ、この僧兵が朝廷へ強訴したのをしずめるために武士が利用された。</p> <p>○都の警備を担当していた。 ◇なぜ摂関政治が衰えたか→藤原頼通に女子が産まれなかった。中央政治を独占する摂関家に対する中下級貴族の反発。 上皇は摂関家をおさえて、武士の力を用いて政治を行った。 ○上皇による院政が行われようになる。独裁的な権力を持つと、荘園は上皇に寄進された。院政の収入は荘園、公領。 ○皇族・貴族は武士の力を頼って政治をしており、源氏と平氏が争いに動員され、平清盛が源氏を破り、武士として中央の政治に大きな力をふるうようになった。</p> <p>◇思考のポイントに沿って、授業ノートや教科書などを使って振り返り、習得した知識を活用する。グラフを作成する際、次のキーワードを活用し、関連づけて説明し、自分の考えをまとめる。</p>
---	--	---

<p>〈思考のポイント〉 ①朝廷・貴族・武士の勢力変化がわかる。 ②勢力が転換することに影響を及ぼした歴史的事象は何か。学習したキーワードを使うこと。 ③②の事象がなぜ勢力が転換することに影響を及ぼしたのか。 ④勢力が転換することで、国は安定したのか。</p>	<p>〈考えるためのキーワード〉 律令国家、班田收授法、公地公民、摂関政治、藤原道長・頼通、白河上皇、院政、寄進地系荘園、保元・平治の乱、平清盛 源頼朝、鎌倉幕府、守護・地頭の設置、封建制度、執権政治、北条政子、六波羅探題、御成敗式目など</p>
--	--

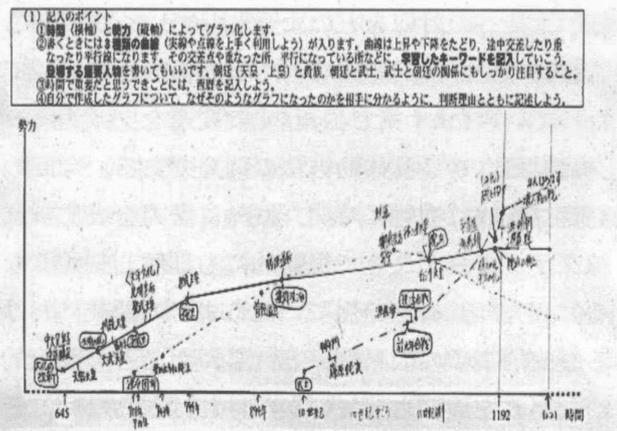
【資料】A『新訂資料カラー歴史』浜島書店 2009、B『グラフィックワイド歴史』とうほう 2010、C『つながる歴史』浜島書店 2009、
 資①「摂関政治」A、資②「藤原道長の栄華」B、資③④「荘園の発達と地方政治の乱れ」B、資⑤「地方政治の乱れ」C、資⑥「国司の横暴と地方政治の乱れ」B、資⑦「武士の発生」A、資⑧「院政の始まりと武士の中央進出」B、資⑨「院政と武士の成長」C、資⑩「保元・平治の乱」C

6 実際の授業

本単元(第5時)は、平成24年11月8日に中学校1年生(2クラス81名)で実施した。本時のねらいは、院政から武家政権にいたる授業の後、古代から中世に変わる時代の転換の様子をグラフ化することにより、時代を大観することにある。生徒の授業後の感想から、①グラフ化するための準備が大変だった。②グラフ化をする際に何度も書き直した。③考えることが大変だったが時代の特色が分かった、という3つのことが読み取れた。実際の授業での生徒の様子と関連づけて説明すると、①については、生徒はグラフを書くにあたって、再度授業用ノートや教科書、資料集のページを何度もめくり試行錯誤を繰り返しながら構想を練っていた(「いつ、どこで、何が、なぜ、どのように」、などを確認していた)。ある程度構想が固まったらいよいよグラフ化である。ところが②からも分かるように、線の角度はこれでいいのか、転換点の歴史的事項は本当にこれでいいのか、などここでも試行錯誤の連続であった。そして、いざ書き始めて波に乗ってくると、学習してきた歴史的事項が徐々に結ばれていくことになった。そして、終盤に差ししかかったところで、再度全体像を俯瞰しながら最終段階の、なぜそのようなグラフになったのか判断理由を考え、記述した。これら一連の作業を行うことで、今までの学習内容を通して、思考力・判断力・表現力を総合的に育

むことができると考える。この授業は、単元のまとめでもあるため、作業にあてた授業時間は1時間で、できなかった続きの作業は課題とした。そして、次の授業において、自分の作成した内容を再点検した後、班での交流を行った（第6時）。なお、交流を行う前に行った、作成したグラフの評価は、A評価が42%、B評価が49%、C評価が9%であった。

次に、生徒の記述したグラフについて、若干の説明を加えつつ紹介した後、C評価の生徒への対応、について記述していく。生徒は自分が作成したグラフについて、説明文を作成した。



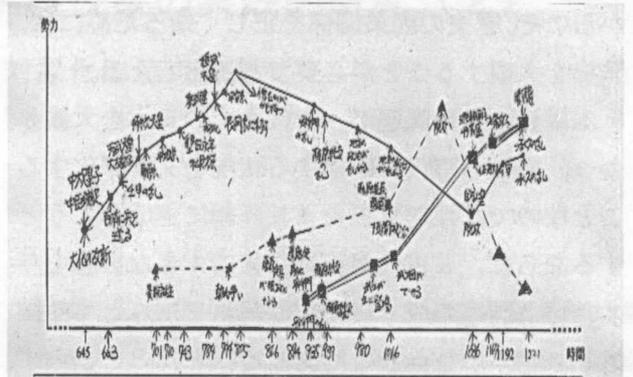
(生徒のワークシート①)

【ワークシート①の説明文】

略…しだいに貴族や僧の間で勢力争いが激しくなり桓武天皇は都を平安京に移しました。平安時代には貴族が力を伸ばし、藤原氏は摂政と関白が中心になって摂関政治をはじめました。摂関政治は藤原頼道のころに最も安定していました。10世紀になると武士が起り、11世紀後半には源義家が東日本に勢力を広げていきました。源氏や平氏といった武士の成長や荘園の増加とともに後三条天皇や白河天皇によって院政が始められました。平治の乱では平清盛が源義朝を破って勢力を広げ武士が政治のうえで大きな力をふるうようになりました。源頼朝は鎌倉を本拠地に定め武士を結集して関東地方を支配し、その後平氏を追い詰め壇ノ浦で滅ぼしました。私のグラフでは、摂関政治と院政、そして武士の力が伸びていく所が歴史の大きな移り変わりところだと思います。

資料①のワークシートは、律令国家の成立から記述されていたが、歴史を大観するという視点からは摂関政治、院政、武士の政権に特化した説明文となっている。グラフ、ならびに説明文について、学習した内容に関するキーワードについて、ほとんどの生徒（評価基準のAとBの一部）は、授業者が期待した項目数を超えて（グラフ中と説明文の中を合わせて）記述している生徒が大半であっ

た。またグラフより、歴史が緩やかに発展の方向をたどる一方、節目節目で急激な展開を示しつつ、



(生徒のワークシート②)

【ワークシート②の説明文】

グラフで線が交わる所は4か所あります。1つめは、今まで平城京や平安京の誕生や聖武天皇や桓武天皇による天皇中心の政治が行われていましたが、それが僧や他の身分によって変わって天皇と貴族が交わる所です。そのころ摂関政治が行われはじめました。そして貴族が権力を持ち始めたころです。2つめは、また貴族と天皇が交わる所です。だんだん貴族の力がおとろえた所です。院政が行われ藤原氏の時代が終わった所です。3つめは、貴族と武士が交わる所です。その時は貴族にかわって武士が力を持ち始めたころです。4つめは、天皇を追いぬいて武士が一番上になる所です。源頼朝がトップに立って、鎌倉幕府を開きました。全体的に見ると、貴族は摂関政治、天皇（上皇）は院政、武士は征夷大将軍等が主な変動のきっかけになっています。

律令国家の形成を古代の特色として把握することはできており、通常の学習をふまえて時代を大観することはできていたと考えられる。確かに古代までの日本の特色といえば、律令国家の成立がそれにあたるであろう。しかしながら、この律令国家の成立は、突如として起こったものではない。縄文、弥生、古墳時代といった長い時代にわたって、それぞれの時代に文化・文明の発明と受容が行われ、その流れの中で形成されたものである。また、海外の国家との交流・接触をもち続け、先進的なアジアの文化・文明を学ぶ中で、日本の天皇を中心とする中央集権国家を形成することの必要性が認識させられたともいえる。以上のことから歴史を大観するという事は、その視点も種々様々であり、その視点をどこに置くかによって歴史的事項の多面的・多角的考察が可能となる。さらに付け加えるならば、歴史を学習する上で最も意識すべきことは、因果関係ではないであろうか。何かが起こった場合、そこには何らかの原因

がある。ただ、歴史における因果関係は、原因と結果の間がものすごく長いためわかりにくい。だからこそ、歴史の因果関係を正しく知るためには、歴史を大観することが必要であると考え。

本単元の学習課題が、古代までの日本を大観しつつ、中世へ時代が転換する状況をグラフ化することなので、課題目標をより詳細に達成しようとするならば、a 古代が後世にまで大きな影響を与えた律令国家の成立、つまり天皇を頂点とする国家システムの整備をとりあげることにとどまらず、b 文字の使用の普及、c 仏教の国家組織の中での公認の3つに生徒の思考が及んでいなければならない。今回は、通常の授業の中でb cの内容をとりあげてはいたが、グラフの中にまで反映させることはできなかった。aを中心としながら、古代を大観し、その上で、武士という新しい階層が台頭し、律令国家にかわって幕府という新しい国家システムが形成されていくことが中心の学習であったといえる。

次にC評価の生徒への対応について、最初にC評価の生徒の特色について述べることにする。グラフ作成までの学習過程において、学習内容をワークシートやノートに書くことまではできているが、学習内容をうまく関連付けながらグラフをまとめていく作業がうまくできないタイプと、前記両方の学習過程に困難をきたすタイプに分けられ、割合から見るとほとんどが前者のタイプであった。これらの生徒に対する対応としては、グラフ化する事前の段階で、取り上げるべき歴史事項の中でも重要度の高いものについて、再度解説を加えたり、小集団活動の中で、班の生徒と交流させることで、グラフの作成のヒントを得る機会を作ったり、あるいはグラフ作成途中にその頑張りを認めて意欲・関心を継続させるような声かけを行っていくことによりグラフ上の記述も増え、より時代を大観することができるようになった。

7 今後の授業に向けて

以上、本稿では、新学習指導要領の中で取り上

げられている、学習した内容を活用してその時代を大観して表現する活動の一つとして、グラフ化することを設定した。設定条件として、今までの知識を活用して、古代から中世に変わる時代の転換の様子を、時間（横軸）と勢力（縦軸）によってグラフ化することを学習課題とした。生徒は、学んだ知識や技能を設定条件にあわせて活用しなければならない。この課題の完成度を高めるためには、グラフ化するまでの授業が、設定された課題を意識した構成でなければならない。本実践では、生徒自身が思考・判断・表現する場面がかなりあった。一方で、課題としては、第一に、C評価の生徒への対応をどのようにしていくかである。これについては具体的な対応策の検討を継続して行っていきたい。第二に、歴史の変遷をダイナミックに大観させる具体的な方法の開発である。今回のグラフ作成は横軸に時間、縦軸に勢力を表す折れ線グラフで表すことで視覚的にも理解しやすくなる。一方で、グラフ化にいたるまでの授業における歴史的事項の因果関係と、学んだことの歴史的つながりを連関させていかななければならない。そのことで、社会的事象そのものをより詳しく知ることができる。そして、生徒の多面的・多角的考察を活かしながら歴史を大観し、より体系的に社会的事象をとらえ、現代の視点から歴史を体験的に考察する姿勢も併せ持ちながら、歴史を理解していく必要がある。今後の課題としたい。

<参考文献>

- 文部科学省：「中学校学習指導要領解説社会編」，2009，日本文教出版。
- 社会認識教育学会編：「中学校社会科教育」，2010，学術図書出版。
- 澁澤文隆：「中学校社会科 定番教材の活用術歴史」，2010，東京法令出版。
- 大濱徹也・山口正：「中学社会 歴史的分野教師用指導書研究と資料編」，2012，日本文教出版。
- 井沢元彦：「学校では教えてくれない日本史の授業」，2013，PHP文庫。